
ラブカクテルス その70

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その70

【Nコード】

N5299E

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は甘くないカクテルをご用意しました。どんな味が、ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は言い伝えでございます。

ごゆっくりどうぞ。

だから私は、あれほど警告したのだ。

我々は環境破壊を止める事ができなかった。

やはり、一度味を占めてしまった甘い生活水準を自分だけ止めたところでどうなるのか？

誰もがその同じ思想を主張して、結局目の前にある数少ない資源を使い尽くしてしまい、後はどうしたものかと騒ぎ出して、後の事を考えられない子供のような状態だ。

そして、その結果からの環境破壊からの天変地異。

愚かだ。

確かに快適さは文化である。

そして一回栄えた文化を引き戻すのは、その快適さを無くす事になる。

文明を抑えて後退させる事は難しい。

ブレーキがない下り坂の車の様に。

私は研究に没頭し、どうせ過ちを止められない我々に、今より快適でいて、しかもこの今頼っている資源を使わずに、代わりになる更なる文明の飛躍を成せるものを課題として努力してきたが、今の力な者共が行なってきた悪事の代償の方が、先に来てしまったようだ。

間に合わなかったと言っわけである。

きつとこの世はもうすぐにも、真っ暗闇に包まれて、草一本生えていないような世界へと変貌してしまうのだろう。

残念だ。

確かに私が開発したこの装置があれば、今の環境を破壊しないで、しかも今より快適な生活をも約束できる十分な環境が整う筈だった。しかし、それはいくらなんでも、今の悪くなつた世界を直せる訳ではない。

結局のところ、ギリギリアウトであつたのだつた。

知り合いの気象学者から、先程連絡があつた。

もう、防ぎようがない自然の猛威が牙を剥いてこちらに向かってやってくる。

想い起こせば我々は、平和になると、その甘く退屈な雰囲気長い事続けていくことに飽きぐるのか、物語の中で世界消滅説をいくつも想像し、それに脅え、震え、楽しんだ。

宇宙人の襲来や、予言者からの手紙、怪獣の攻撃や地底人の奇襲、はたまたサルスの逆襲や悪魔の目覚め、地殻変動により、昔あつたはずの大陸が浮いてきて、代わりに今ある陸地が沈み、文明が入れ替わるなどの非科学的なくだらないお話し。

しかし今、目の前にきている世界の終わりが、まさか自分達が積み重ねて作った災いのせいで訪れるとは、夢にも思わなかつたに違いない。

私はこの世界に呆れ、そしてやって来る宿命を仕方なく受け入れるしかないのは、もう、諦めている。

しかし、只で死んでしまふには、この私にはできそうにない。
なぜなら私は往生際が悪いのだ。

出来ればせつかく作り上げたこの装置を、なんとか後世に伝えたい。
しかしこの世界はこれから津波に呑み込まれ、地震で地は崩れ、何
もかも壊してしまふに違いない。

そんな中で生き残るものがあるだろうか？

いや、必ずや生命は存在するであろう。

それが最悪な環境の中だとしてもいいのだ。

私はそれに賭けて、最後の最後に捨て身の策に出る。

知り合いの植物学者が、わざわざ私の熱意に共感してくれ、ある草
を遺伝子操作の末、この装置の場所を印す鍵として咲く植物を改良
に改良を重ねて、とうとう完成させてくれた。

私や、私の思想に賛同してくれる各地の同士達によって、この作戦
はあちこちで決行され、いつの日にかこの装置を誰が使ってくれる
事を願って止まない。

私はもうすぐそこまで来ている、その最後の瞬間がきたときに、そ
の種を特殊なカプセルに入れて飲み込むつもりだ。

やがて海水に体が押し流され、私は溺れる。

きつと臓器の中はその海水で満たされてしまい、じきに溺死した体
は下に沈み、魚がいれば餌にさえなるかもしれない。

しかし、願わくば私は自分の死体が陸へと流れ着き、この種の肥料
となって花を咲かすこと望む。

または、土の下に埋もれてもいい。

特殊なカプセルは、日の光を浴びて溶け出し、その時初めて種を土
へと返す。

種は根を張り、地上に向けて芽を出す筈だ。

装置の在りかを示して。

そして驚く程の繁殖力であちこちに咲き乱れる。

それを我々の子孫達が見つけて、気付いてくれることを切に思う。

さあ、怖がることはない。

苦しみは一瞬にしか過ぎない。

しかし私の願いは未来へと繋がるのだ。

さあ、私の体を殺め、その代わりに新しい世界を広げるがいい。

これを慰めとして我は自らの運命に身を任そう。

もう目の前には、世界のリセットボタンであるう、高い津波がゴウゴウと凄く激しい音と共に、こちらに覆い被さってくるのが見えた。きつと、冷たいと感じる余裕もなく、恐ろしいその勢いで、先に体は砕け、あつと言う間もなく死は訪れたに違いない。

今日も眩しい光が朝の訪れを知らせた。

カラカラに乾いた大地に容赦なく、その光が熱となって照り付け、風は土埃が立ち込める嵐を幾度となく引き起こす。

憂鬱だ。

俺は変わり果てた地球に降り立って、調査の傍らある探しものをしてる。

このイカしてしまった星に隠されているという、ある有名な学者さんが開発した快適環境装置だ。

俺達は、選ばれし者として、あの運命の日に宇宙へと飛び出した人類の末裔。

当然乗れる人数は限られている小さな船だったそうだ。

その当時は、かなりの金持ちがこの脱出計画に挙って集って来た。

しかし考えてみても、金はこうなってしまうたら何の役に立つと言うのか。

下らない肥えた亡者達がこの計画に参加したところで、我々の未来には何も残る事はなかっただろう。

未来に必要な者、それは賢い頭脳と生きる執念、そして何でも出来る度胸だ。

俺の祖先は生きるため、結果的に数えきれない程の数の人を殺し、悲痛の声を最後に聞いて旅立ったそうだ。

そんな中、せつかく選ばれて生き残った者の中にも、結局その精神的苦痛に耐えられずに後々狂ったり、自殺する者が何人もいたという。

仕方ない。強い者が生き、弱い者がなくなっていくのは自然の摂理だ。

しかし生物とは生きるために存在しているのだ。

遺伝子は次々に遺伝子を繋いでいこうとするのがこの地球で生まれた物の使命なのだ。

俺はあまり深く物事を考えないようにして、地上に転がり、もう誰の役にも立たなくなつた文明の残骸に想いを寄せることなく、黙々と自分のやるべき作業を行なつた。

きつとほとんどの、この星にあつたであろうその痕跡は大量の土砂の下に埋もれ、そうでもなければ、あの広がってしまった海の下、海底にひっそりと沈んでいることだろう。

以前高くそびえていた山の頂上だけが海面に頭を覗かせて、陸地となつて残っていた。

そして、その陸の環境といえば、地面は乾き、そして灼熱。

きつと今まで地球を覆っていた気体の層が崩れ、それを元に戻そうと、太陽が浴びせる熱がまるで地球の治療をしているように、水蒸気と雨の繰り返しを促して、古代に行われた生物の楽園目指して、また長い歴史を刻んでいるように思えた。

やはり太陽は神で、地球は再生を望んでいるのだろうか？

そして人類はまだ、当分この星での生活は難しい。

そう思っていた。

しかし、しかしだ。

我々人類が移り住んだ宇宙ステーションのマザーコンピューターは、この地球に早くも人間が住むのに可能なエリア、聖地が少なからず現れたと分析した。

食料の底つきや、空気の汚れを毎日懸念して暮らしてきた人類にとつて、それはかなりの朗報だった。

そして、この脱出計画を考えた学者の子孫が、第一代生存者の頃からの言い伝えである噂の装置の話しを、新人類議会に持ち出し、地球に帰って暮らすゴーホーム計画を発足。

生き延びた新人類は、それに向けて動き出したのだった。

そして調査に降りたつては見たものの、どこをどう探せばいいのか。探索機はそれでもなくとも狭く、このところ毎日座りっぱなしで、体が軋んでいくようだ。

しかしデータでは、外気温はとても人間が外に出れるほど生温くないようで、これでは体を伸ばすことも到底できない。

俺は様々なデータの取得を機械に促す様にして急かし、早いところステーションに帰えることばかりを考え、この状況の中に、聖地があるなどと打ち出したマザーコンピューターを疑いたくなっていた。これのどこに人類が住める場所があると言うのだ。

しかし事態は急変した。

探索機のあらゆる計器、モニターグラフが一斉に世話しなく動き出し、そして外に出ると危険だと示すドア横のセンサーランプが、安全を示す緑に変わったのだった。

俺はたまげた。

操縦席からモニター越しに見える地表には、なんとそこだけ緑の草が生えた夢のような光景が広がっていた。

聖地だ。

俺は呟き、急いで機内から外に出た。

確かにデータ通りに、外は穏やかで、風も爽やかだった。

これが地球か。

俺はその、何とも言えない素晴らしさに心を踊らせた。

地面である大地を踏みしめ、人類がまたここに帰ってきたという貴重な第一歩を、俺は成し遂げたのだと感極まった。

サワサワと優しい風に吹かれて揺れている、何とも可愛らしい草達。実際本物を見るのは初めてだ。

ステーションでは、何もかもがクローン。

生きた植物や、動物を食料とするのではなく、肉であればその細胞から肉のクローンを作り、野菜であれば、その食べる部分をクローンとして殖やし出すのだ。

だから牛肉はあっても牛はいないし、トマトはあっても、それがな
る木はステーションには存在しないのだった。

そのせいで食べ物の種類は数える程しもなく、味は不味くはないが、
当たり障りがないその特徴の無さに、昔あった楽しみというものは
食事から消え、ただ栄養を採るという作業、機械の燃料の給油に似
ていた。

それに加えてクローンではやはり限界もあるらしく、その何とかあ
る味でさえこの頃薄くなっていて、システムに不満の声が出始めて
いる始末。

結局、地球からの脱出といっても、その当時してみれば食料の味
などは気にする余裕すらなかった訳だから、そんな事を言っている
とバチが当たると昔の人は言うかもしれないが、しかし人は欲望が
あるのだからこそその人間であり、その欲望が文明を生み出し、そし
て滅ぼしたとも言える。

まあ、何にせよ實際目の前にある草、そして花は本物だ。

俺は感心と感動で、その一つを手に取りろうとした。

その時だった。俺は耳を疑った。

花が、花達が風にサワサワと揺らされながら、なんと喋り出したの
だった。

俺は花とは喋るものなのかと、その声に耳を奪われていると、花達
は驚くべきことを話してきた。

知ってるよ知ってるよ。装置のある場所知ってるよ。環境よくする
装置のある場所知ってるよ。

俺は思わずそれがどこだかを興奮気味に訪ねてみた。

すると花達は、可愛らしい声で続けた。

この草原の真ん中の下に埋もれているよ。いらっしやい。草原の真ん中にいらっしやい。

花達が誘ってきた。

そして俺はまた目を丸くして驚いた。

なぜなら、目の前に広がったその光景は、群生した花達が、まるで俺に道を開けるように長々とその茎を伸ばすと両脇に別れ、この時を待っていましたと花の真ん中ある口を揃えて俺を歓迎したからだった。

俺はそんな花達に囲まれながら草原の中央に進んだところで、その下にあるであろう、目当ての装置を取り出そうと興奮気味に、携帯穴掘り機を取り出した。

すると、次の瞬間、俺のその行動を阻むように、一本の花が俺の顔の前に飛び出してきた。そしてその花は言った。

美味しそう。いただきます。

その声は俺の周りを囲む花達の合唱の合図のようだった。

ちきしょうが！

あんなに脱出計画のために食料用の遺伝子改良に手を貸してやったというのになんだ！

約束が違うじゃないか！

所詮人類がそうして生き延びたところで、また地球を、そして私の愛して止まない植物達を壊すだけに決まっている。

人間は害虫だ！

この地球にとっても、植物達にとっても。

なんて事だ。忌々しい。こんな私を裏切った罪は重いぞ。
は、は、は、そうだ。良い事を思いついた。

この罪は後世に償ってもらおうとしよう。

この世界の終わりを迎えてもどんな環境にも耐え、もの凄い繁殖力を持ち、そして人間を食べる花を遺伝子改良して種を散らそう。

しかし、どうやって人間を誘き寄せればいいだろうか？

うん？

なになに、後世に快適環境装置を伝える学会？

何を言っているんだ。後世にそんな物を残したところでどうなるか、いや、待てよ、これを餌にすれば、バカ共の末裔は引つかかるに違いない。

イヒヒヒ、見ている、罪もない人を殺し、自分達だけ生き延びた罰だ。ハッハッハ！

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5299e/>

ラブカクテルス その70

2011年10月4日10時04分発行